

温度が変わると色も変わる、という繊維がある。

旭化成ライフ&リビングの「サラランアート」。04年に発売され、今は人形や手袋をはじめエンターテインメントとして用いられている段階だが、「昼の仕事時と夜のお遊びタイムで色が変わるスーツ」など、新たな衣世界の可能性

## 流行支える「新しい繊維」

への夢を刺激してくれる。

思えば服の可能性を大きく広げる役割を果たしてきたのは、形のデザインよりはむしろ「新しい繊維」ではなかったか。

たとえば化学者チャールズ・マッキントッシュが1823年に発明したゴム混の繊維は、防水レインコートの可能性を開いた。デュ

ポン社の研究員S・クウォレクが1965年に作り出した「ケブラー」は、鋼鉄の5倍の強さをもつ合成繊維で、防弾着の開発を促した。同じくデュポン社が59年に開発した、ストレッチ効果の高い人造繊維「ライクラ」は、身体にフィットする下着やアウターを生み出し、その後のボディーコンシャ

スの流行は「セクシーなライクラ」なしにはありえなかったほど。

近ごろ大人気の白いボトムだつて、透けにくい繊維の開発があつてこそという背景を思えば、流行をつくる立役者は「時代の気分」といったあいまいなものもあることながら、新しく開発された繊維であるようにも見える。

## 中野香織の

## コロモのココロ

今シーズンの「プレッピー」ブーム再来に際して、以前のブームに着ていた服をひっぱりだしても「着られない」。服のシルエットが微妙に変化したためなどではない。服が違うのである。ナノテクノロジーを駆使した最新の繊維でつくられたプレッピー趣味の服は、形は同じでも、かつてのものとは別物に感じられる。

服の流行はぐるぐると回るだけに見えるが、そのぐるぐるを決して重ならない「らせん状」にしている力の一つは、進化し続ける繊維かも。らせん一回りする間に「着られない」服になるもう一つの理由は、鈍化し続ける身体であつたりもしますが。

◆なかの・かおり 服飾作家。62年生まれ。東京大学大学院修了。著書に「スーツの神話」など。